巻頭対談

岡留安則×田中康夫

●元・月刊『噂の眞相』編集長

田中康夫流 究極の日記文学が生まれるまで

作家生活から、阪神淡路大震災、神戸〝市営〟空港でのボランティア活動、そして長野県知事としての県政改革……。12年目を迎えた今、文学もメディア批判も食もセックスもすべて同じ目線で語る田中康夫を解体する。

何でもありの日記は田中康夫そのもの

岡留　『噂の眞相』で始まり、休刊後に『SPA!』に移った「東京ペログリ日記」は、今や長期連載になりましたね。

田中　田中康夫にしては珍しく、偉大なるマンネリだったりして（笑）。

岡留　田中さんの人生を凝縮した連載だと思いますよ。それはもう政治や官僚からメディア・文壇批判もやるわけだし、食べたものから飲んだワインも書くし、その上にやった女までイニシャルで登場する。そういう意味で究極の日記文学っていうか、これは田中康夫しかできないスタイルの日記ですね。

田中　その過激な日記連載を、田中康夫にやらせてくれる『SPA!』も奇特だよね（笑）。

知事に就任以降は、PG、TS、ONといったペログリの表示もなくなったし、夜遅くに自宅で母親手作りの食事をする回数が増えたので、料理店の登場頻度も少なくなった。

そういう意味でいうと、この連載はもうちょっと食べ物とか、ワインとか女性を出さなきゃね。あと、新聞やテレビの幹部とかと食事をしたのも、書かないで欲しい、と向こうから懇願（苦笑）されて、仕方ないから自粛した場合も随分とあるからね、最近は。情報公開の意識が最も遅れているのが記者クラブ制度に安住する人々なわけだよ。そういえば、岡留さんは最初、「全ての日を載せなくても、某月某日っていうような形でいい」、「赤裸々に女性の話や詳細に美味いメシの話なんか出しても、あんましウチの読者は面白がらない。嫉妬するだけ。別世界だから」と言ってたね。

岡留　そんなこと言ってないです。副編集長の川端幹人なりにそういう伝え方をしたのかもしれないけど（笑）。

田中　言ってたよ。硬派な社会ネタ批判をメインにしてくれって（笑）。だけど、『噂眞』で連載を始めたいきさつって何だったんだっけ。

岡留　最初は、田中さんが責任編集していた会員制の『トレンドペーパー』を僕も愛読していた。そこで田中さんが日記を連載していたわけですが、「田中康夫ってカゲキだなー」いう強烈な印象があった。その会員制雑誌が休刊になっちゃったので速攻で、川端に、「田中康夫の連載を絶対とってこい。条件は1つ、赤裸々で恥ずかしくなるような性描写だけは勘弁してくれ」と指示した。ま、その辺の折り合いもあってPGっていうマークを……。

田中　だけど、PGの表記は、途中から出てくるんだよ。その昔に付き合ってた白百合女子大の娘が命名したペロペロチャン・グリグリチャンね（笑）。で、TSはテレフォン・セックス、ONはオナニーと。

岡留　『トレンドペーパー』の頃はけっこうカゲキなポルノまがいの描写もありましたよ（笑）。

田中　いやいや、あの頃から、例えば『A嬢と食事。自宅』って書いてあるなら、自宅に来てペログリしてるってことなの。食事の後にホテルの名前が書いてあるのも、そこでして泊まってるって話で、わかりやすかったんだけどね、昔から。

岡留　僕が記憶しているのは、西麻布の大使館近くの路上に車を止めてカーセックスしようとしたら生理中だったので、女性のあそこをなめたとかの描写があって仰天した。そこまで書くのは女性読者にはいかがなものかと……その点だけは配慮してもらうことで連載を開始した。

田中　こだわるねぇ（苦笑）。でも、書くようになっちゃったじゃん。結果的に。

岡留　いや、『噂の眞相』の「ペログリ日記」の連載は『トレンドペーパー』に比べれば全然露骨じゃなかったですよ。『噂眞』読者は、そういうところは真面目で過敏に反応する読者がいるから、そこだけ抑えてくれれば、後は何でもOKの条件だった。

田中　過敏って言うか、嫉妬しやすい、って話でしょ（笑）。そりゃ、田中康夫は永遠に嫉妬の対象なのよ。

岡留　そりゃ、そうかもしれないけど（笑）。話を戻せば『トレンドペーパー』がたまたま休刊になったので連載を引き継ぐいいチャンスがめぐってきた時、予想もしないとんでもない事件が起きた。宅八郎事件っていうか。田中さんの連載を始めようとしたら私憤で田中康夫攻撃中だった宅八郎が自分の連載『業界恐怖新聞』が打ち切られると妄想を抱いて過剰な反応を示してきた。結局、「田中康夫が4ページなら僕にも4ページくれ」と駄々をこねてきた。宅連載はそのドタバタで一号休載になった。最終的には安部譲二が仲介に入ってきて表面上は何とか納まって、宅連載も一応再開した。

田中　でも、程なく彼の連載は終わってしまった。

僕のほうは逆に、4ページにギュウギュウ詰めで小さな活字にしたほうが、あのザラ紙的な「噂眞」で生活を明かしてる臨場感が増すから、「びあ」の「はみだしびあ」ぐらいの級数にしてくれって言って、字数を増やしたのね。で、『某月某日』というのは、リアリズムにならないから、必ず日にちを入れる」って言った。

岡留　ただ、実際の日にちが入ると、田中さんは原稿早いほうじゃないから（笑）、12月の日記が3月号ぐらいに出たりする時はつらかったですね。正月挟むとけっこう時間が空いちゃう印象になるから、2カ月後に日記を読むと情報として古いという感じになって、読者のほうもちょっとシラけるところがある。雑誌自体も速報性が疑われる。僕としては、1カ月後ぐらいに出るペースなら読者的には同時進行に近いリアリティを持って読めるからという、編集発行人としての判断があった。

田中　そしたら、新潮社の『ニコラ』が発刊になった時、その原稿執筆時点での話を入れたら、そこで言及された中森明夫から時制が違うと怒られちゃった。

岡留　ハハハ。でもこの連載、基本的にクレームはなかった。

田中　っうか、田中康夫がやってることに、どうやってチャチャ入れていいか判んないんじゃないの？　差別用語書くとか、そういうことないから。

岡留　確かに文体的にも突っ込みにくいし、巧妙だし（笑）。

田中　律儀に反応してくるのは、権威主義な猪瀬直樹くらいだね（笑）。

岡留　あ、阪神大震災の時、ダイエー広報部からクレーム来ましたね。僕が田中さんに「ダイエーのこと書くな」とか絶対言うはずないけど、旧知の人物だったので、「はいはい、わかりました」と応えてすぐ帰した（笑）。

田中　それ以外には全然。

岡留　ただ、『SPA!』もそうかもしれないけど、やっぱり田中さんが『噂眞』唯一の綱渡りの原稿でしたね。しかも毎月。

田中　一番遅かったの？

岡留　別格ですよ。だから、担当の川端なんか校了でヘトヘトになって疲れているに、校了後にまた一人でトボトボ印刷所行って、自分で校正していた。それで田中さんと締め切りをめ

ぐって怒鳴り合っていたこともあるでしょう？　なんと県知事に向かって「康夫のバカ野郎！」（笑）。

田中　それがいいんだよ。権威を自ら捨て去っていく田中康夫。体重は減らないけど（笑）。

サラリーマン以外はすべて公人？

岡留　『ペログリ』を読んでいて思うけど、田中さんには本音と建前の使い分けがないから何でも書いちゃう。女とやったって話は、「編集長日記」を書き続けた僕でも書かなかった（笑）。

田中　ペログリ嬢たちが出てきた座談会（大全集第②巻に再録）を載っけたのはすごいことだって周りの編集者が言ってたけど、そうなのかなぁ、ってのが僕の感覚。普通のサラリーマンじゃない人はみんな公人ってのが僕の考え方だから、別に当たり前なのね。

言論人を気取る連中みたいに、政治家と官僚だけが公人と考えるのはけしからん話で、反論する場所が容易に用意されてる人は公人なんですよ。キャスターも論説委員もね。

だから、編集長は実名で書くけど副編集長は匿名ってのは違うんじゃないの、ってのが僕の考え。だって反論の場が確保されてんだもん。

岡留　その件では、僕なりの名誉毀損に対する三段階の対処法があったんです。編集長は社会的影響力を行使する責任者だから実名でしょうがない。デスクは微妙なので一応イニシャル扱い。平の記者は名前を入れない。そのかわり、上司からは○○記者が怒られる可能性はある。

田中　なるほど。

岡留　「ペログリ日記」が面白かったのは、人脈や情報が日記にふんだんに盛り込まれているってことです。基本的に公私ともに全部情報公開する。

田中　全然普通じゃん。「時間の使い方が下手だな、効率が悪いな」って思いながら、遅々として進まない原稿を前にして、「もっと楽しい人生ないかな」って思って書いてきた日々だよ、80年の暮れにデビュー以来の25年間は。

岡留　田中さんは普通だと思うかも知れないけど、他にそういう日記を書いている人はいないのだから、やっぱり傑出していますよ。かなり以前に田中さんが古井由吉と対談した時に、「俺のチンポは長くはないけど松茸みたいにカリがデカイ」とか自分で喋っていた。

田中　あったね。河出書房から出した『フェティッシュな時代』。田中康夫を捉える上でフェティシュは、ひとつのキーワードだね。

岡留　自分のペニスの形まで喋る文化人なんて他にいない。露悪的すぎて変態と紙一重（笑）。

田中　だって、そんなの自分たちが産んだ子どもを連れて歩いてる夫婦のほうがよっぽど露悪だと見ることも出来るよ。タモリが同じことをネタで言ってんだけど、2人の合作の子どもを間に、3人で手つないで歩いてるぐらい恥ずかしいことはないとね。

岡留　まあその点はまったく同感だけど、全体的には僕とは美意識に微妙にズレがある（笑）。

ホテトル手配師的マメさは政治家の資質のひとつ

岡留　ペログリ嬢たちが逆に田中康夫を語るっていう座談会も絶対に面白いと思って企画をしましたけど、普通だったらそれは企画段階で終わる。でも、田中さんは率先して自分で声を掛けて女性たちを集めてくれた（笑）。その座談会をやった後も参加した4人をみんな送っていった。感動したな（笑）。

田中　座談会はあなた方が勝手に新宿のヒルトンホテルでやったんだよ。ブルジョアジーの岡留さんが確か会員だったアメ帝のヒルトンで（笑）。

岡留　いや、座談会の後、会場の部屋まで迎えに来て僕に挨拶して全員を連れて帰りましたよ。

田中　やったあと会って、連れて帰った？　そうだっけ？　俺はホテトルの手配師か（笑）。

岡留　そのマメさですよ。スッチーを成田空港でピックアップして都内で食事してホテルに泊まってエッチして、また成田まで送っていくマメさは僕にはありえない。「3万円あげるからタクシーで行ってね」です（笑）。そのマメさ、気配り、エネルギー、情報公開、すべて政治家のあるべき資質に通じる。阪神大震災の時のボランティア活動でも、公的精神やセンスのよさも見えたから本来のあるべき政治家の素養にピッタンコだと思った。もちろんメディア批判とか政界を見る洞察力も一貫して持っていたわけだから、これほど政治家向きのタイプはいないというのが僕の認識だった。だから、田中さんが長野県知事選に出る時、僕は即賛成した。副編集長の川端は反対だったけど。

田中　反対したっけ。

岡留　川端は乗り気じゃなかった。新宿のホテルリステルで、右翼に襲撃された『醇の眞相』を励ます会を内輪でやってもらった時ですよ、田中さんが出馬の気持ちを固めたのは、多分。そのパーティに田中さんも来てくれましたが、そこに佐高信、宮崎学、宮台真司、鈴木邦男、田原総一朗、『朝まで生テレビ』の故・日下雄一氏とか業界人が集まっていた。ちょうど前日に田中さんが「長野知事選出馬か」みたいなベタ記事がスポーツ紙に出た後で、「田中さん、この際、絶対出るべきだ」って皆で言ったんです。特に僕と佐高氏と田原氏の3人が強く推した。

田中　そうそう。その時、確かに川端さんだけダメって言ってたね。

岡留　川端のほうが編集者としては正しい対応かもしれない。政治に出て行ったら『ペログリ』が面白くなくなるからダメだって。実際、そういう部分もあったけど、僕は編集者の立場を捨てて田中さんの将来を優先して判断した（笑）。それ以前から田中さんの政治家としての素養を見抜いていたわけだから、『醇の眞』はともかく政治家として大成して欲しいと。僕は田中さんが、政治に関わる決断に至った動機というか背景には、阪神大震災があったと思っています。神戸周辺に自分のセフレとかがいっぱいいて、その人たちをお見舞いに行こうとバイクでボランティア活動に出かけたことが、田中康夫を変えたと思う。

田中　いや、当時いないよ…ああ、人妻が1人いたな。でも、セフレなんて安っぽい言葉は使わないで欲しいぜ。田中康夫のイメージじゃない（苦笑）。

岡留　ボランティアの動機自体は不純だけど、逆に左翼や市民運動派と違って、建前じゃない新しい本音スタイルだった。

田中　不純じゃなくて、不可分なんだよ、田中康夫はそこが。

新党日本の代表の田中康夫も長野県知事の田中康夫も、へっぽこ物書きの田中康夫も、主体であり客体であり両方やってるんですよ。「田中康夫は」って言い方がまさにそれなんです。もう1人の自分が弁証法で観察してるのね。

テレポリティックス的で、中身のない小泉純一郎も「小泉改革は」って言い方をするけど、彼の場合は歌舞伎やオペラの主人公を自分が演じてる気分でしょ。他の人は不幸でも一向に構わない。でも、そんな不純な付け焼き刃じゃ、いつまでも騙し続けられないから傷

付かぬうちに引退しちゃおうと。どこまでもナルシスなミーイズムなんだね。

岡留　不可分な田中さんは（笑）、阪神大震災のボランティアの後、その延長線上で神戸空港反対運動に関わって、それが神戸市当局と直接ぶつかることにより政治への道に繋がったと見ている。

田中　'80年に『なんとなく、クリスタル』で出て、'85年から『ファディッシュ考現学』を「朝日ジャーナル」で始めるわけ。で、'90年に『神なき国のガリバー』が「週刊SPA！」で始まって、直ぐに湾岸戦争になって、'95年に阪神・淡路大震災で、それで2000年に知事になって、2005年に政党まで作っちまった（笑）。考えてみると田中康夫5年周期説なんだよね。

停学を受けて身につけた？失うもののない強さ

岡留　田中さんのデビュー作、『なんとなく、クリスタル』は、文壇内ではサンザンで評価は低かった。そういう点では、田中さんは作家デビュー直後から困難な体験をしてきたからこそ、今日の個人原理に立脚した、したたかな強さがあるんだと思う。

田中　まあ、時代よりも更に早いから、田中康夫は（笑）。なんと中学時代にはNHKの放送陸上で走っただけの事はある（笑）。OSもCPUも早い。でも、大きな人生観の転換は、卒業間際に停学食らったことでしょうね。停学がなければ、内定してた日本興業銀行に行って、英語ももう少しは喋れるようになって外資系金融機関へ行って、大儲けして、でも多分失敗してたと思う（笑）。まあ、起業してたかも知れないけど。いずれにしても、もはや24歳にして何も失うものはない、と実感した経験から来てるわけ。『なんとなく、クリスタル』を書いて、文壇という狭い世界で守られている連中が理解しなくたって、向こうが発展途上で遅れているんだよ、と思えば頭にも来なかったね。

だから連日、田中批判を展開する地元メディアも田中康夫にとっては、屁のカッパ（笑）。既得権益を失うのが怖い経営者の下でサラリーマン記者を務める面々には逆に同情を禁じ得なかったりするね（笑）。

だから「よくそこまで守旧派と闘い続けられますね」って聞かれるけど、そんなの当たり前で、妥協したら、後で一生悔いが残る。先日、浅田彰と宮台真司との鼎談でも、今のメディアはみんな聴病者だよね、って話したんだ。「何が怖いの？」っていう感じ。その意味では、包丁持って乗り込んできた輩と素手で戦った岡留氏はやっぱり大したものだよ。

岡留　いやいや（笑）。

田中　ホテルとかのラウンジでちょっと水をこぼされると、すぐに「君、失敬じゃないか！」とボーイを怒鳴るような似非インテリな奴。つまり失うのが怖い連中は、わんさかいる。僕は別に失うものないから。

岡留　そこが多分、田中さんの精神的ルーツ、原点だと僕は見てますね。それを『ファディッシュ考現学』とかの批評コラムで、だんだんカゲキかつ論理的に打ち出していくことになる。

田中　湾岸戦争への加担に反対するために六本木の国際文化会館に集った時、今は亡き中上健次氏が『文学界』の編集者に「おい君、タバコ買ってきてくれ」って言ったのよ。で、僕は「中上さん、タバコぐらい、自分で買いに行くもんだよ」って言ったら、周りがみんなビビッてるわけ。僕は自分で荷物持って、どこへでも1人で移動する人間だから、編集者にタバコ買いに行かせるのが当然って発想には馴染めなくて、で、思ったことは言ってしまう性格だから、当たり前の話をしたまでなんだけどね（笑）。

ゲッて相貌になったのを覚えてるよ。まあ、中上氏本人は生きてれば、政治家としての僕をもっと評価したと思うよ。康夫ちゃんは康夫ちゃんで生きてるからいいんだよ、と何時でも言ってくれてましたから。

白洲次郎氏が「子どもに好かれない大人は偽物だ」って言ってたけど、僕は永遠に子どもから好かれてるからね（笑）。そりゃそうだよ、子どもはやっぱり見抜くんですよ、表と裏のある奴を。おバアちゃんから好かれるのも、同じだね。

田中康夫型の政治が広がれば政治スキャンダルはゼロ

岡留　現在の田中さんは関心が性事から政治にシフトしちゃった訳だけど、それは作家の立場でいろいろと主張しても目に見える形で満足できる結果にならなかったのが、政治にタッチしてからは具体的に政治が動き、メディアも動く快感を知ったという面もあると思う。その快感に比べれば、別にペログリは二の次でもいいやという指向になったんじゃないのかな（笑）。

田中　いや、僕はサーヴィス精神を発揮できる場があればハッピーなのよ。長野県の知事になったのも、政官業学報が癒着したピラミッドを壊してくれ、と請われて、これは遣り甲斐があると思ったから。明治期の〝お雇い外国人〟と同じだね。ただ、オーストリアからウィンドウズ95レベルの砂防学者を連れてきたと思ってたら、XPとリナックスを同時に起動してもスタックしない超〜砂防学者（笑）だったので、戸惑ってる県庁舎周囲の皆さんもいるって感じかな。でも、価値観の違う県議会が足を引っ張ろうと、神戸の住民投票よりは世の中を変えられる。膀胱腫瘍の手術をしても、体調は絶好調だけど、正直、恋愛よりも愉しんでるよね、仕事を。まあ、W嬢とケミストリが合うのも大きいけど（笑）。

その意味では、普通の国会議員が浮気するのは、判る気がするよ。衆議院でワン・ノブ480で党議拘束もあるから、思うに任せないことが一杯でしょうよ。他の知事も共産党以外の相乗りで当選してるから、議会とはナアナアな蜜月でも、背後に利権分配目当ての「顧問団」が多くて、思うに任せぬストレスは多いんじゃないかな。

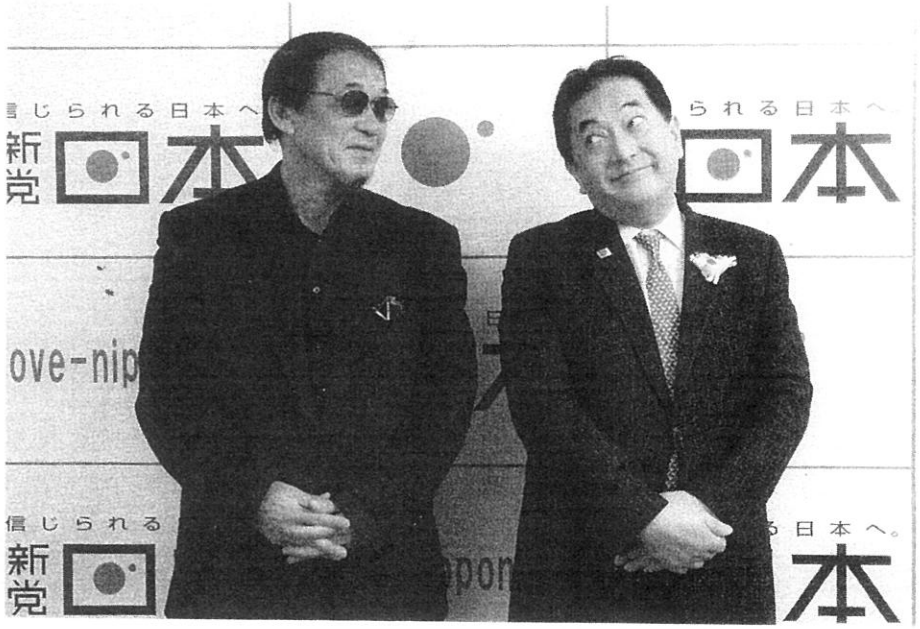
僕の場合、はっきり言って全国で唯一、政党も組合も各種の補助金交付団体も全部反田中康夫だからね（笑）。共産党に至るまで。新党日本だけだ（笑）。だけど、条例や予算や人事案が否決されようとも、やれることはやれるわけだ。だから、自分の信ずる道を歩んでるだけ。なあんて、他の人じゃ言えないセリフでしょ。

岡留　田中康夫の最大の功績は、文学もメディア批判も食もセックスもすべて同じ目線で語るということだと思う。田中康夫が県知事になった時に、「これは日本の性と文化の革命だ」「日本の夜明けは信州から」って言う趣旨のことを僕は書いた。写真週刊誌にSMホテルでの秘め事を素っ破抜かれた時でも、セックスは隠すのは当然だっていうふうな世の常識を覆して、堂々コメントに応じてきた人物が公人の代表たる県知事に当選ですからね。別名「田中康夫効果」ともいって、スキャンダル雑誌の存在すら無化させた先駆者（笑）。

田中　それはウソウソ！『噂

1992 上半期

1月20日（木）小選挙区制導入について、故三木元首相の妻、睦子氏や佐高信氏ら学者・文化人6名が参院議員会館で記者会見
1月29日（土）政治改革4法案（小選挙区比例代表並立制等）成立
2月11日（金）服部調理師専門学校で、全国の料理学校経営者に講演
3月25日（金）「オン・ハッピネス」を新潮社より出版
4月26日（火）社会党連立政権から離脱
5月29日（日）ロータリー・アクト（ロータリークラブのヤング版）で講演
6月4日（土）調布パルコで講演。夕刻、小林よしのり氏と対談
6月30日（木）自社さ連立政権発足、村山富市内閣成立



の眞相』を休刊した理由の「嘘の眞相」（笑）。いずれにしても、メディアに出ている他の連中は表と裏があるんだろうけど、田中康夫は最初からそんなものないんだもん。宮台真司が言ってるけど、フランス的な政治家が誕生したってことだね。ミッテランやジスカールデスタンは、幾人もの愛人というか恋人がいてもノー・プロブレームだったでしょ。岡留さんも副編の川端さんと幾度か来たけど、田中康夫が100人規模でホームパーティを開くと、素知らぬ顔して歴代の女性が、事情を知らぬ男性とやって来て（笑）、しかも、その時に付き合ってる複数の女性が和気藹々と会話しながら受付に立っていたなんて、そうそうないよね（笑）。

それとね、亡くなった元「朝日ジャーナル」編集長の伊藤正孝氏が「田中康夫は仮面舞踏会に忍び込み、仮面をかぶって着飾っている連中に、『あなたの実像は、実は欺瞞に充ちた肥溜めの上に立ってる偽善者じゃないか』と囁く、彼らにとっては決して認めたくない忍び寄る影だ」といった秀逸な内容を文庫本の解説で書いて下さったけど、当たってるね。ちょびっと切った振りをして差し上げますから、なあんて絆創膏も用意した上での出来レースな日本の批評とは違って、田中康夫は正面から行って「オメエ、斬ってあげる」ってインフォームド・コンセントした上で言うんだから（笑）、不気味だよね。

岡留　田中康夫型の政治家がもっと日本に増えていければ、もうスキャンダル雑誌の存在は必要ないだろうし、その分、政治の世界は透明性を強めて確実によくなるだろうけど……。

田中　そりゃあ、無理でしょ。地位や権威の精神的ブランドを失うのが怖い人ばかりだから。それに、田中康夫の希少価値が薄れちゃうしね（笑）。後にも先にもオンリーワン（爆笑）。

profile
YASUNORI・OKADOME●1947年11月23日、鹿児島県生まれ。法政大学社会学部、法学部卒業。'75年に『マスコミ評論』を創刊。'79年『噂の眞相』を創刊し、編集発行人として'04年3月まで反権威を旗印にジャーナリズム活動を続けた後、黒字で休刊。著書に『「噂の眞相」25年戦記』（集英社新書）、『「噂の眞相」イズム』（WAVE出版）、『武器としてのスキャンダル』（ちくま文庫）など多数

1月16日(日)

「POPEYE」に昨年来より連載を始めた「だてにモテてる訳じゃない」の原稿を夕方まで書く。1回分が四〇〇字詰原稿用紙で8枚弱のこの作品は2回で1話完結の連作小説。モテる為(ため)の要素はカオじゃない、クルマじゃない、カネじゃない、コトバだよ、と康夫恋愛哲学の集大成を開陳の文章。

但し、難点がひとつ。スラスラ書いてるように見えて、どっこい、たったの8枚書くのに毎回、丸3日もウンウン呻吟。ってことは、ミニクラのネエちゃんより時給が低い。

品川区に住む日航スッチーS嬢をピックアップして池袋西口のタイ料理、ストアーズ。本来はタイ人〝ホステス〟向け一膳飯屋のこの店は、辛目とリクエストすると超〜利く利く。落日の日比谷のチェンマイより凄い。取り分け、夕食時と明け方に行くと、複雑な思いになる社会勉強的光景の連続。帰りに飯倉片町のキャンティでお茶。

1月17日(月)

月曜日は毎週、11時から13時まで文化放送の「梶原しげるの本気でDONDON」に出演。終了後、六本木は鳥居坂にある国際文化会館のコーヒーハウスで「ビッグコミックス、ビリッツ」に連載の「田中康夫のニッポンご託宣」喋り。シュワッチのO氏が毎回、まとめてくれる。この日の題材はJリーグ。他にインタヴュー1本。打ち合わせ1本。

併設されている図書館で原稿を書いてると、お電話です、と18時前に司書のお嬢ちゃまが。出ると、昨日デートのスッチー。な、なんと、左半身が死ぬ程痛くて会社の診療所に行ったらヘルペスだと宣告。尤(もっと)も、性病の方ではなくて一安心。原稿中断して羽田まで迎えに行き、青山の湖月で京料理。帰りに広尾の明治屋で買い物してると、余りに痛くて彼女、泣き出す。

1月18日(火)

日比谷のキャセイパシフィックで、NHKでディレクターやってる別れたQ嬢分の香港までの復路ファーストクラスティケットを払い戻し。気が付いたら香港—東京の往路に一緒に搭乗してから明日で1年。

10時に矢来町の新潮社。NECのデジタルブックで「なんとなく、クリスタル'94」を出すので、そのチェック。従来の脚註プラス'94版の新註も。凝ってしまう質なので、なかなか進まない。昼食は地下の社員食堂。健康の為に胚芽米を使っているので舌の肥えてる新潮社の皆様には不人気。大盛りお代わりしたら、食堂のオバちゃん喜ぶ。喜ぶ。

19時に原宿のウエストで杉並区に住む日航スッチーH嬢と待ち合わせ。西麻布のダノイでイタリア料理。赤ワイン2本。二人で帝国ホテルのタワー客室。彼女のみ深夜に帰宅。

1月19日(水)

ヘルペスで寝込むS嬢の為に帝国ホテルのガルガンチュワでパン、銀座のなか田でちらし寿司と太巻、空也の最中(もなか)を買い求めて愛情宅配。一緒に食べる。夕方、帰宅。原稿。

1月20日(木)

午前中、新潮社でデジタルブックの続き。午後、参議院議員会館内で三木睦子女史、佐高信氏らと小選挙区制導入の政治改革関連法案に反対する記者会見。取り敢えずのビールは、その後に日本酒、ワイン、ウイスキーと変更が出来るが、取り敢えずの小選挙区にはその後が無い。飽くまでも先(ま)ずは腐敗防止法が先決だと喋(しゃべ)る。

「今後の活動は」と「朝日新聞」の記者が尋ねたので「全国民が細川平成翼賛体制に組み込まれようとも、私しゃ、一人で書き続けます。喋り続けます」と決意表明。

ついでに、「女帝作家とカラオケやるのが仕事の社長にでも言っといて下さいよ。小選挙区制反対の文章を載っけてくれるんだったら、田中は喜んで書きますって」と言ったら、他社の記者が大爆笑。

終了後、國弘正雄氏、田英夫氏らと話をする。ところで、記者会見前の打ち合わせに顔を出していた自民党の白川勝彦氏から貰(もら)った「自由への連帯の会」の檄文は感動的。アサヒを始めとする凡百のインチキ民主主義野郎よりも数十倍、リベラルで個人主義で驚く。ナチズムは変革・改革への欲求から生まれた点で細川翼賛体制に酷似しているとの指摘は鋭い。自民党にも案外、侮(あなど)れない人物が居るものだ。

大分、痛みも取れて具合が良くなったS嬢と自由が丘のシェルガーデン。自宅で鍋。

1月21日(金)

ブーケット島のアマンプリを始めとする一連の展開を行っている香港ベースのアマンリゾートが新しくフィリピンの小島にオープンしたばかりのアマンプロへ、実は昨日よりS嬢と1週間行く予定だったのだが、彼女の病気で直前キャンセル。が、その結果、昨日の記者会見にも参加出来たのだから、世の中判らない。

TVは出るもので見るものではない、というのが持論なものだから、「東京新聞」から参議院本会議での法案否決に関するコメントを、と電話が掛かって来て、初めて知る。行数を聞いた上でコメントを自分で書いてFAXする。終日、原稿。夕食、僕が中国料理を4皿程作る。

1月22日(土)

明け方3時に起きて「SPA!」の「神なき国のガリバー」を書く。イタリア語のレッスンに行くS嬢を乃木坂に送り、国際文化会館の図書室で、家から持って来た朝刊各紙の参院否決関連記事を見る。

「この事態を憂える」(朝日)、「改革実現へ活路求めよ」(読売)、「談合的取引は許されない」(毎日)、「逆転成立に全力尽くせ」(産経)と社説のタイトルを並べた後に、「原点に返りまず腐敗防止法成立を」(日経)を置いてみると、現在、最も信頼に足る政治的スタンスの新聞はどこか、が一目瞭然。

進歩的知識人と称する方々は、バブル新聞と貴方方(あなたがた)が揶揄してきた「日経」が実は最も細川平成翼賛体制に批判的であるという矜恃(きょうじ)をどう捉えるのか。そうして、貴方方が心の糧(かて)と崇(あが)めて来た「朝日」が、それまで反対していた筈の小選挙区制をコロッと支持するようになった変節をどう捉えるのか。

「読売」「産経」はその昔、自民党政権時代から小選挙区制導入論者だったのだから、一応は「筋」が通っている。「連立」が誕生した途端に変節した「朝日」「毎日」は一体、何時(いつ)、自己批判をしたのか。甘ちゃん左翼が常に戦争を作り出して来た歴史は再び、繰り返されるのか。

S嬢を再びピックアップして東池袋の生粉打ち亭で蕎麦。千駄木の菊見せんべい。三色と呼ばれる醤油(しょうゆ)味、白砂糖味、緑茶味のセットと、砂糖を一面に塗(まぶ)した単品がお勧め。

上野のうさぎやでどら焼き、みつばちであんみつを買い求め、同じくヘルペスが耳に出て慈恵医大に入院中の彼女の先輩を一緒にお見舞い。どうも、スッチーの間でヘルペス大流行の兆し。3日間で痛みも取れ、痕も残らなかったS嬢はラッキー。

飯倉のキャンティでお茶。快気祝いに帝国ホテルのタワー客室。

1月23日(日)

銀座の福臨門酒家で飲茶。料理も2品頼んだのでいいお値段。品川区の部屋へ送った後、自宅。朝まで原稿。

1月24日(月)

終日、原稿。

1月25日(火)

同じく終日、原稿。周富徳氏の本を見て3皿作る。お世辞にも旨いとは言えない赤坂の璃宮に籍を置く氏の唯一の功績は中国料理、別(わ)けても広州家庭料理とは実に簡単な代物であることを日本のオバちゃんに知らしめたことか。

1月26日(水)

新潮社でデジタルブックの作業。胚芽米を大盛り2杯食べるのが快感となる。午後、「SPA!」のS副編集長が訪れて打ち合わせ。

S嬢をピックアップして田町の菩提樹で中国素菜料理。つまりチャイニーズ・ベジタリアン。ホテルの客室に仏教聖典を寄贈している仏教伝道協会のビル内。

1月27日(木)

新潮社。デジタルブックの作業終了。信濃町のめし処あいざわで一人寂しく夕食。夜、自宅にて原稿。